

学校・地域・家庭のウェルビーイングを目指して

— 共育コミュニティと学校運営協議会の一体的推進 —

橋本市教育委員会

1. はじめに

橋本市は、和歌山県の北東端、紀伊半島のほぼ中央に位置し、北は大阪府河内長野市、東は奈良県五條市に接する緑豊かな田園都市です。市域の北部は和泉山脈が、南部は紀伊山地から派生する山々が占め、その間を貫くように東から西へ紀の川が流れている。

「橋本」の地名は、天正13年（1585）に応其上人が荒地を開いてまちをつくり、その2年後、紀の川に長さ約236mの橋を架けたことが由来となった。また、高野街道と伊勢（大和）街道の交差する交通の要衝として、高野山参詣者の宿場町、産業の集散地として栄えてきた。面積は130.55平方km、人口は令和7年2月28日現在58,697人で、産業としては、豊かな水と温暖な気候を利用して、柿や巨峰を中心とする果樹栽培や養鶏が盛んに行われているほか、養鶏による卵の生産、紀州へら竿やパイル織物は大変有名である。2016年には、紀伊山地の霊場と参詣道の一部として黒河道が世界遺産に登録されている。



紀の川流れる橋本市中心部

2. 教育目標

橋本市では、「第3期橋本市教育大綱（2023年度～2027年度）」を策定し、「人が学びあい、共に育むまちづくり—自治と協働のまち橋本市に向けて—」の理念のもと『豊かな心と健やかな体を育みます』『家庭教育・学校教育・社会教育の中で多様な学びを育みます』『地域・家庭・学校が連携した地域教育力を育みます』という3つの基本方針と、13の重点目標を定めている。重点目標の中でも【持続可能な社会の創り手を育む教育（SDGs・ESD）を地域と協働しながら推進します】【共育コミュニティと学校運営協議会が連携・協働し、大人も子どもも学びあう場づくりを推進します】という重点目標をつなぎ合わせながら、多様な学びを通して、地域教育力を育むことを推進している。

3. 教育委員会・学校での取組

○橋本市 ESD プログラム（教育委員会 学校教育課）

一昨年度から再開した対面型の研修も今年度で3回目を迎えた。毎年、ねらいに合わせて、対象や開催形態を変更しながら内容をブラッシュアップしてきた。今回は、奈良教育大学と連携し、ESD ティーチャープログラム橋本会場（全5回）として開催したところ、市内各小中学校から10名の参加があった。そのうちの1回を橋本市 ESD プログラムとして開催し、学校や地域から幅広い層の方が参加された。奈良県の優良実践事例を共有する中で、参加者からは共育コミュニティや学校運営協議会の仕組みを活用し、地域資源（ヒト・モノ・コト）の発掘につなげることができるのではという意見も出された。



優良実践事例発表

○橋本市未来プロジェクト（教育委員会 生涯学習課・学校教育課、清水小学校6年）

本事業も3年目を迎え、総合的な学習の時間の出口として位置づけ、橋本市と協働で進めている。次代を担う子どもたちが、ESDを通して地域の課題を自分事としてとらえ、自分に何ができるのか、小さな実践を通して、自らの意見を市長や教育長に提案した。今年度は、清水小学校が「通学路の安全確保」「公共施設の管理」などの視点から見てきた課題について提案された。提案発表の前後に教育委員会が関わりながら、市役所各担当課に橋渡しを行ったり、中間発表では学校運営協議会委員や共有コミュニティ関係者向けに発表し、内容をブラッシュアップしていった。



市長・教育長に提案



事後学習

○世界遺産学習全国シェアミーティング（高野口小学校）

今年度は世界遺産学習全国サミットに代わり、世界遺産学習全国シェアミーティングが開催されることとなり、木造校舎が国の重要文化財に指定され、ユネスコスクールとなっている高野口小学校の取組を、ESD主任の岡本教諭が事例発表を行った。

「地域の魅力再発見」というテーマの分科会で、ESDを核にホールスクールで行っているふるさと学習について発表した。ふるさと学習の中で、課題を自分事として捉え、PBL（Project Based Learning：問題解決学習）を意識するとともに、高野口地域は、地域とのつながりが深く、地域を意識したPBL（Place Based Learning）も実践している。その中で、地域の方にも学校の学びを知ってもらうために、学校運営協議会で育てたい子ども像の共有、教員と学校運営協議会委員の対話を通して、やりたいことが明確になり、ESDカレンダーで見える化を行っている。また、ユネスコスクール同士の交流、重要文化財校同士の交流も積極的に行う中で、児童の「高野口愛」が育まれ、価値観と行動の変容が少しずつ見られるようになってきている。



小学校全景



児童の変容（地域清掃）

4. おわりに

橋本市全体として、総合的な学習の時間や生活科を核としながら、他にも学校運営協議会や共有コミュニティと連携し、地域と協働する機会が多くなってきた。ただ、特定の先生方が地域とつながっているという学校も見受けられるので、橋本市ESDプログラムを有効に活用し、教職員や市民への周知を継続的に図るとともに、学校ごとに伴走支援していく手立ても検討する必要がある。あらゆるステークホルダーと協働する体制を構築していければと考えている。